

Colonization and Economic Development of Sertao in Northeast Brazil

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/435

ブラジル北東部におけるセルトンの植民と経済発展

丸山 浩明

Colonization and Economic Development of Sertão in Northeast Brazil

Hiroaki MARUYAMA

はじめに

ポルトガル人により16世紀に始まるノルデステ(Nordeste, ブラジル北東部)の植民活動は、ゾナダマタ(Zona da mata)と呼ばれる熱帯季節林が展開する大西洋の沿岸部から始まった。植民当初の主要な経済活動は、沿岸部の森林内に自生する染料源としてのブラジル木(Pau Brasil)の伐採・採集であった。しかし、天然に自生するブラジル木を捜し、移動しながらの伐採・採集活動は、植民者の土地への定住化を促すものではなかった。そして、資源に限りあるブラジル木はたちまち伐採し尽くされ、荒廃した森林は植民者に何ももたらさなくなった。

そこで、ブラジル木に代わる第2の経済産品として、ポルトガル人がノルデステに導入したのがサトウキビであった。彼らはすでにマデイラ諸島で行っていたサトウキビ栽培の経験を生かし、おもにゾナダマタを流れる可航河川沿いにエンジェーニョ(Engenho, 砂糖農園)を建設してサトウキビを植え付けた。これは当時陸上交通がほとんど発達していなかったため、エンジェーニョにとって原料のサトウキビや製品の砂糖、あるいは植民者の食糧などを運搬するのに、内陸部と沿岸部の港を結ぶ水運の役割が何よりも重要であったからである。また、河川が運ぶ肥沃な沖積土はサトウキビの生育を助け、さらに河川周辺に広がる森林は製糖に必要な薪燃料を十分に供給した。

レシフェを貫流するカピバリベ川下流域の氾

濫源に沿った地域や、レコンカヴォ(Recôncavo)と呼ばれるサルヴァドールのバイア湾(Bahia dos Todos os Santos)周辺に広がる肥沃な低地帯に初めて導入されたサトウキビ栽培は、その後リオグランデノルテ州のポテンジ(Potenji)川、パライバ州のパライバ(Paraíba)川、ペルナンブコ州のウナ(Una)川やイポジュカ(Ipojuca)川、アラゴアス州のムンダウ(Mundaú)川など、ノルデステの沿岸部を流下する主要な河川の流域に急速に拡散し、多数のエンジェーニョがそこに建設されていった。また、町や都市がエンジェーニョを核に形成され発展した。

ブラジル木に続く第2の経済ブームを創出したサトウキビ栽培は、ポルトガル王室や植民者に巨万の富をもたらしただけでなく、その定着・永年性が植民者の土地への定住化を促した。ポルトガル人植民者の数は、16世紀におけるサトウキビ栽培の著しい発展とともに急増した。加えて、エンジェーニョで酷使する奴隷として強制連行されたインディオや黒人、さらにこれらの人種間の混血により生み出されたメスチーソが加わって、ノルデステの沿岸域では人口が急激に増加した。

サトウキビ栽培の発展とともに、ポルトガルがノルデステの沿岸部で植民活動を活発化させた背景には、16世紀末から17世紀前半にかけて本地域を舞台に繰り広げられた、植民地の乗取りや金品の略奪を目的とするフランス・イギリス・オランダによる激しい攻撃に備える防衛

上の理由があった。すなわち、ポルトガルは1580年にスペインに併合されたが、そのスペインの無敵艦隊が1588年にイギリス海軍に敗北したため、ポルトガル・スペインの海上での制海権が弱体化した。イギリスやフランス、オランダは、この機を狙ってノルデステの攻撃を活発化させたのである。これら諸外国との激しい戦争において、ポルトガルは外敵が容易に進入しやすい沿岸部、とりわけ内陸と海とを結ぶ主要な河川の河口部を占拠し、そこに都市を築いて堅牢な防衛体制を構築しようとした。

このように、ノルデステの沿岸部では、16世紀における製糖業の著しい発展や、ヨーロッパ列強国との植民地争奪戦争に対する堅牢な防衛体制の整備により、次々と町や都市が建設され人口が増加した。そして、16世紀末頃までには、南はバイア州のバイア湾沿岸から北はリオグランデドノルテ州のポテンジ川流域に至るまで、ノルデステの東岸域はほぼ植民・開発された。

イガラス(Igaraçú, 1536年)、オリンダ(Olinda, 1537年)、コンセイソン(Conceição, 1527年、イタマラカ Itamaracá の島の上に建設)、サルヴァドール(1549年)、フィリペイアデノッサセニョラダスネヴェス(Filipéia de Nossa Senhora das Neves, 1585年、現在のジョアンペソア)、サンクリストヴァンドリオデセルジペ(São Cristovão do Rio de Sergipe, 1590年)、そしてナタール(1599年)は、こうして建設された当時の代表的な都市であった²⁾。

しかし、サトウキビ栽培の拡大と植民地の防衛に全勢力を注ぎ込む当時のポルトガルにとって、ゾナダマタの背後に広がる広大な内陸奥地のセルトン(Sertão)は、まったく関心の外であった。そこは熱帯乾燥・半乾燥の広漠たるカーチンガ(Caatinga, 有棘灌木林)地帯であり、植民者に巨万の富を約束するサトウキビ栽培は不可能であった。そのため、ポルトガル人入植者による植民活動が本格化するのには、ゾナダマタより実に約1世紀以上も遅れてからのことであった。そして、セルトンはゾナダマタのサト

ウキビ栽培と砂糖の輸出経済を支えるための住民への食糧供給基地として、牧畜業の導入により初めて開発されることになった。

そこで、本研究はゾナダマタの従属一補完地域として17世紀以降に遅れて開発が進められた、ノルデステの内陸部に位置するセルトンの植民過程と経済発展の特徴を解明することを目的とする。

I 牧畜業の発展と空間占拠

1. 牧畜業の内陸部進出

16世紀中頃にノルデステに導入されたとみられるウシは、当初サトウキビを搾る圧搾機の動力源や荷物などを運搬する役畜としての役割を担った。さらに、ウシは植民者の生活に必要な不可欠な肉や乳製品、あるいは皮革類を提供する重要な家畜でもあり、その排泄物は畑の貴重な肥料となる一方で、農地から出る作物の屑はウシの重要な飼料源となった。

沿岸部に導入された糖業や牧畜業の規模がまだともに大きくなかった16世紀には、家畜が農地に入って作物を荒らさぬように、大きな溝(Valados)や植生を利用した牧柵(Cercas vivas)を敷設することで、容易に家畜を農地から切り離すことができた。換言すれば、16世紀にはまだ糖業と牧畜業がともに共生関係を保ちながら沿岸部で共存することが可能であった。サトウキビ栽培を妨げなければ沿岸部におけるウシの飼育を認めるという王室令(Ordenação reais)は、糖業の最優先性を規定しながらも両者の共存を容認する当時のポルトガル王室の姿勢を示すものであった。

しかし、ヨーロッパにおける砂糖消費の絶え間ない拡大は、16世紀後半から沿岸部の糖業を加速度的に発展させ、サトウキビ畑の急速な拡大を促した。ポルトガル王室は、重商主義政策の推進や植民地の防衛強化の観点から、さまざまな優遇措置のもとで沿岸部の植民活動とサトウキビ栽培を積極的に推し進めた。その結果、

家畜の進入を防ぐために広大な農地の周囲に牧柵や溝を連続して敷設することが、資金的にも労力的にも著しく困難となった。また、セニョールデエンジェーニョ (Senhor de engenho, 砂糖農園主) たちは、金儲けのために競って農地を開墾しサトウキビを植え付けた。こうして、牧畜業は糖業と同一空間で共存することが不可能となり、次第に沿岸部の糖業地帯から切り離されて、当時未開発であった内陸部のセルトンへと進出することになった。

17世紀は、糖業から分離独立した牧畜業の内陸部進出が活発化した時代である。その背景には、スペインによるポルトガルの併合 (1580年～1640年) により、新大陸における両国の国境線を定めた1494年のトルデシリャス (Tordesillas) 条約で法的に抑制されていた、トルデシリャス線を越えての西方 (= スペイン領) への進出が公然と可能になったことがある。

また、前述のように16世紀末からイギリス・フランス・オランダによるノルデステ沿岸部の攻撃が活発化した。1587年のバイア攻撃に始まるイギリスの襲撃は、おもに金品の略奪を目的とする海賊的なものであったが、1594年にマラニオン州のサンルイスを占拠したフランスの攻撃は、“赤道フランス”の建設を目論む植民地争奪戦争であった。しかし、ポルトガルを最も苦しめたのは、オランダの度重なる攻撃であった。

すなわち、1621年に西インド会社を設立したオランダは、ポルトガルのスペイン併合により損なわれたブラジル産の砂糖の直接支配による利益の奪還を目指して、1598年よりノルデステの占領に向けて本格的な“砂糖戦争”を開始した。1599年のサルヴァドール攻撃に続き、1630年にはオランダやレシフェを攻撃して占領した。さらに、1633年にはリオグランデドノルテ、1634年にはパライバ、1634～1641年にはセアラ・セルジペ、1641年にはマラニオンを攻撃し、ノルデステ沿岸部の諸都市を次々と占拠して“新オランダ”の建設を押し進めた。ヨハン・マウリッツ・ファン・ナッソー＝シーヘン伯

(Conde João Maurício de Nassau-Siegen) が、新オランダの統治者としてレシフェに赴任する1637～1644年は、まさにオランダによるノルデステ支配の黄金時代であった。

このような諸外国との激しい植民地争奪戦争の中で、沿岸部で糖業を営めない植民者や、対オランダ戦争の激しい戦火を逃れようとする農場主たちが相次いで内陸部へと移住し、そこで牧畜業を営むようになった。

サトウキビ栽培には不向きな厳しい乾燥気候に加え、港湾からも遠く離れたセルトンでは、輸送費の観点からも輸出経済としての糖業が存立する基盤はなかった。他方、自ら移動できる家畜は、糖業ほど海岸からの距離に立地を規定されることはなく、むしろ内陸部は粗放的な牧畜業には欠かせない広大な牧場が開設できる有利な条件を備えていた³⁾。また、サトウキビのような植物とは異なり、ウシは内陸部の乾燥した苛酷な気候条件にもよく順応し、食餌性もカーチングの自然植生にうまく適応することができた。加えて、乾燥地の塩性土壌やそれが生み出す岩塩地 (Salt licks) の存在も、セルトンにおける牧畜業の定着を保証する重要な環境条件となった。

17世紀における牧畜業の内陸部進出や空間占拠を加速化させたもう一つの要因は、先住民の捕獲・鎮圧や金鉱の探索を目的とする遠征隊 (エントラーダ Entrada とかバンデイラ Bandeira と呼ばれる) や総督府兵士の奥地派遣であった。すなわち、内陸部に広大な牧場を開設するためには、まず何よりも先住民であるインディオを強制的に排斥する必要がある。同時に、沿岸部のエンジェーニョでは、対オランダ戦争による農場破壊や逃亡奴隷の出現により深刻な労働力不足に直面しており、安価な奴隷労働力の獲得が必要となっていた。

そこで、内陸部の開発と牧畜業の振興を目論む大農場主や政府は、土地を占拠するためにインディオ討伐隊を組織して奥地へ派遣したのである。彼らはインディオの集落を襲撃して家屋

を破壊し、土地を奪って牧場を開設した。さらに、1570年のインディオ奴隷化禁止令によりその捕獲と奴隷化が法的に禁じられていたにも関わらず、彼らは高額な黒人奴隷の代替としてインディオを捕らえ、沿岸部のエンジェーニョに公然と売却を続けた。イエズス会はこのような白人によるインディオの捕獲と奴隷化に強く反対し、人道的な立場からインディオの保護とキリスト教への改宗を進めようとした。そして、内陸部にアルデア(Aldéia)と呼ばれる教化集落を建設し、彼らをそこに囲い込むことで植民者に対するゲリラ的な抵抗活動を抑制しようとした。

こうしたインディオの教化集落として形成された村落はノルデステ中に数多く存在し、今なおその痕跡を地名にとどめている。バイア州のジャコビナ(Jacobina)やサンフランシスコデシャーガス(São Francisco de Chagas, 現在のバーラ Barra 市)、ペルナンブコ州のカプロボ(Cabrobó)やタカラトゥ(Tacaratu)、セアラ州のクラト(Crato)やイコ(Icó)、インアムンス(Inhamuns, 現在のタウア Tauá)、ピアウイ州のオエイラス(Oeiras)やパルナグア(Parnaguá)⁴⁾、マラニョン州のサンフェリックスドバルサス(São Félix do Balsas)などはその代表的なものである。しかし、遠征隊はこのような教化集落をも襲撃してインディオを捕獲し、奴隷化禁止令を蔑ろにし続けた。

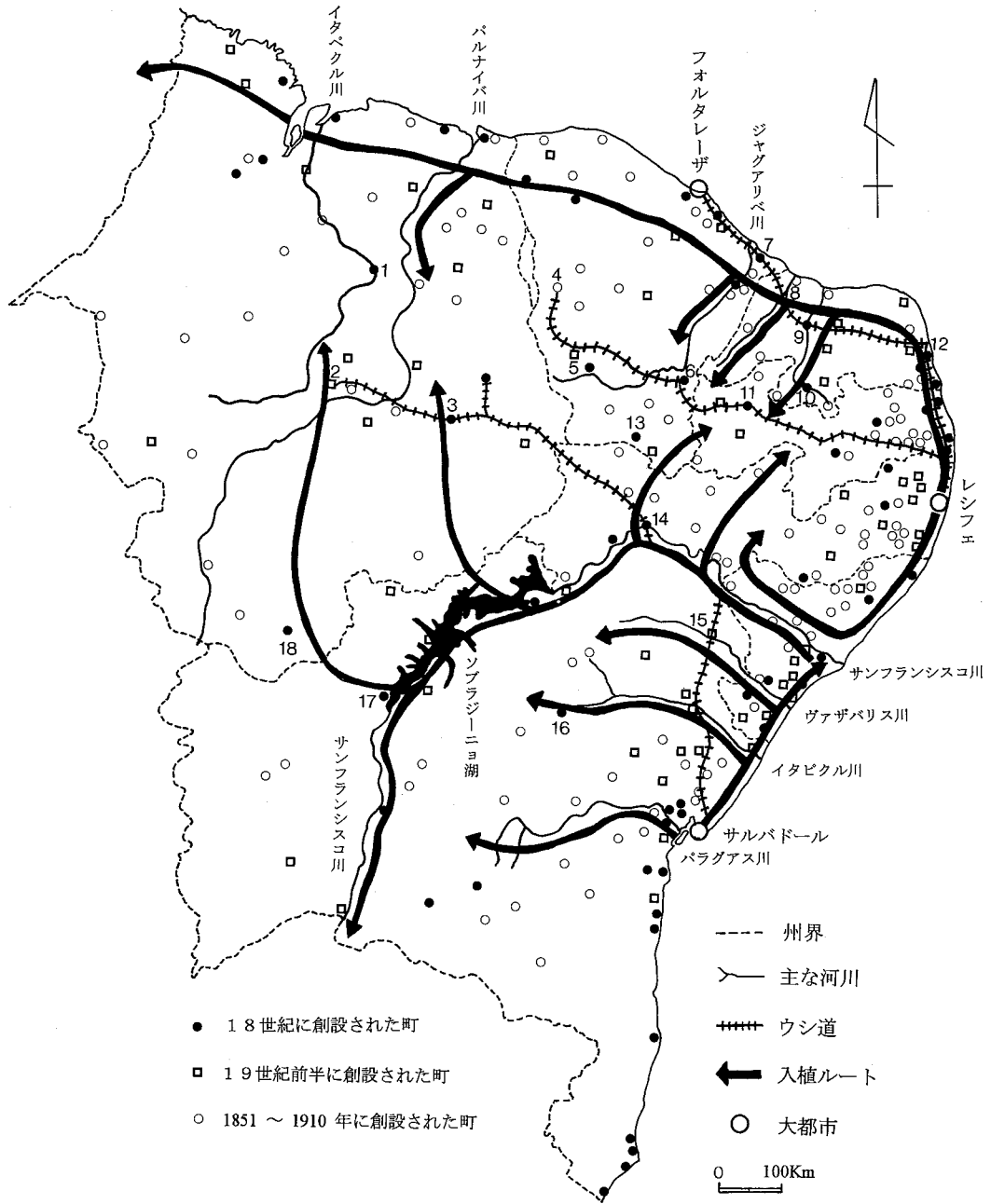
このようなポルトガル人たちの野蛮で劣悪非道な植民活動に対して、インディオたちは白人たちが容易に入り込めないボルボレマ高地の奥地へと逃げ込み、ゲリラ的な抵抗活動を続けた。とりわけ、パライバからペルナンブコにかけての内陸部に広く居住していたカリリ族(Cariri)⁵⁾の激しい抵抗活動は有名である。一般に“未開人の戦い(Guerra dos Bárbaros)”とか“アスの戦い(Guerra do Açú)”, “カリリ族の連合(Confederação dos Cariris)”などの名で知られるカリリ族の激しい抵抗活動は、17世紀後半に約10年も続いた。しかし、17世紀末に

は、バイアとペルナンブコから進出してきた白人入植者たちに周囲を包囲され、カリリ族は制圧されてインディオの抵抗活動も沈静化をみせた。

遠征隊や総督府の兵力は、インディオの鎮圧と同時にオランダ戦争に乗じてエンジェーニョを破壊し逃亡した黒人奴隷の捕獲にも力を尽くした。逃亡した黒人奴隷たちは、内陸部の各地にキロンボ(Quilombo)と呼ばれる逃亡奴隷集落を形成して、インディオ同様、遠征隊や総督府兵士の襲撃に対して激しく応戦した。しかし、彼らも結局は鎮圧され、再びエンジェーニョに売り飛ばされる運命を辿った。アラゴアス州の内陸部に出現したパルマレス(Palmares)は、逃亡奴隷により建設された巨大なキロンボで、その激しい抵抗活動により長く政府を苦しめ続けた。しかし、この象徴的な黒人逃亡奴隷集落も1694年にはついに陥落して姿を消した。

こうして、17世紀末まで続く遠征隊や総督府兵士によるインディオや黒人逃亡奴隷の活発な捕獲活動は、結果としてそれまで未開発であった内陸部への進出と空間占拠を著しく促進することになった。また、奴隷や金鉱を求めて内陸部に分け入った人々の中にも、そこに定着して牧畜業を始める者が現れた。こうして、17世紀にはイタバイアナ(Itabaiana, 1665年)、ジャグアリベ(Jaguaribe, 1693年)、カショエイラ(Cachoeira, 1693年)、サンフランシスコドコンデ(São Francisco do Conde, 1693年)、サントアマロダスプロタス(Santo Amaro das Brotas, 1697年)といった町々が牧畜業の進出を契機に形成されていった(第1図)。

17世紀に進展した内陸部進出と牧畜業の空間占拠は、18世紀にはさらに加速化され、沿岸部の糖業地帯と内陸部の牧畜地帯という2大経済地域の空間分化がますます顕著となった。糖業が発達して人口が集積した沿岸部の町や都市では、セニョールデエンジェーニョたちが競ってサトウキビ畑を拡大した結果、住民たちは深刻



1. カシアス 2. パストスポンス 3. オエイラス 4. クラテウス 5. タウア 6. イコ
7. アラカティ 8. モソロ 9. アス 10. カイコ 11. ボンバル 12. ナタール 13. クラト
14. カプロボ 15. ジェレモアボ 16. ジャコピナ 17. パーラ 18. パルナグア

第1図 ノルデステ内陸部への植民ルートと主要な町
(Andrade, Manuel Correia de (1979) をもとに作成)

な食糧不足に陥り慢性的な栄養失調の状態が続いた。とくに、人口が急増して町や都市が拡大した18世紀頃には、食糧不足が最も深刻であったという。

そこで、政府はマンジョカの生産を強要する法令を出したり、土地無償分譲の場合には初年度から食糧生産を義務づける法令を出して食糧の確保に努めた。しかし、セニョールデエンジェーニョの中には、“私はマンジョカなど1本たりとも植えません。この国で最高の作物（サトウキビ）をこの国で最低の作物（マンジョカ）のために栽培を断念するような愚考を抱きたくはありませんから”と、公然と法令に挑戦する者もあったという。一握りの特権階級である彼らにとっては、いかに食糧を高く購入しようとも畑にはサトウキビを植える方が遙かに得だったのである。そして、富裕な農場主を除く沿岸部の大多数の住民は、常に深刻かつ慢性的な栄養失調の状態に置かれていた。

そのなかで、18世紀にはセルトンは沿岸部への唯一の食糧供給基地としてその重要性をますます強化し、牧畜業はノルデステの主要な経済活動として著しい拡大と発展を遂げた。ピアウイ州のかつての首府であったオエイラス(Oeiras, 1712年)やフォルタレーザ(Fortaleza, 1726年)、イコ(Icó, 1736年)、アラカティ(Aracati, 1747年)、ソウレ(Souré, 1755年)などは、18世紀に入ってから形成された都市である(第1図)。

このように、ノルデステの開発と空間占拠の歴史は、沿岸部で栄えた糖業とそれを支える牧畜業という2つの基幹的な経済活動の時間・空間的展開過程の産物そのものといえる。両者は空間的に分離しながらも、互いに密接な共生関係を保ちつつ、沿岸部と内陸部にそれぞれ独自の経済・社会・文化地域を作り上げてきたのである。

2. 牧畜業の内陸部進出ルート

17世紀に始まる牧畜業の内陸部進出は、総督

府の置かれていたバイアのサルヴァドールと、ペルナンブコのオリндаという2つのカピタニアの中心都市を起点として始まった。バイアを起点とする内陸部進出は、直接セルトンの奥地深くへと分け入る経路で進展した。一方、ペルナンブコを起点とする内陸部進出は、セルトンを取り囲むようにまず沿岸部に沿って進み、そこから主要な河川沿いに内陸部へと遡上するものであった。両者の進入経路には大きな差異が認められるが、2つは最終的にセアラ州の内陸部で合流することになる。内陸部への進出は総督府の兵力に支援されたバイアからのものが先行し、ペルナンブコからのものよりより積極的な植民活動を展開した。

しかし、ともにサンフランシスコ川などの主要な恒常河川に沿って入植が内陸部へと進展した点は共通であった(第1図)。乾燥が厳しい内陸部での牧畜活動にとって、サンフランシスコ川などの河川が提供する飲料水や岩塩、そして良質な天然牧草地は必要不可欠であった。また、道路が未発達であった当時、干し肉や皮革などの生産物を沿岸部の諸都市まで輸送するためにも河川の実在は重要であった。

サンフランシスコ川などの恒常河川を遡上するのは異なり、陸路による内陸部への進入は困難を極めた。すなわち、ノルデステの内陸部には海岸低地と急崖により隔てられた標高約400~1,100mのボルボレマ高地が立地しており、そこに逃げ込んだインディオたちのゲリラ的な抵抗活動とも相俟って、陸路でボルボレマ高地を横断しての植民活動には大きな人的・物理的障害が存在した。

1) バイアからの植民ルート

内陸部へ向かう進入経路の中でとりわけ重要だったのが、サルヴァドールを起点にまずは北上し、現在のバイア州北部とセルジペ州の沿岸域を占拠した後⁶⁾、サンフランシスコ川の右岸に沿って上流へと遡上するルートであった(第1図)。

この経路に沿って、17世紀にはサンフランシスコ川の中流域まで植民が進展したが、そこでパウロアフォンゾ(Paulo Afonso)の大瀑布(写真1)に進出を阻まれることになる。しかし、牧畜業は17世紀後半には滝を越え、さらに川沿いに上流へと進出して発展を遂げた。こうして、サンフランシスコ川の河畔には16世紀の終わりから17世紀にかけてバイアからの入植者により牧場が次々と開設され、サンフランシスコ川はいつしか“牧場の川(Rios dos currais)”と呼ばれるようになった。

バイアからの入植者がサンフランシスコ川流域に導入した牧畜業は、その後2つの進入経路により伝播・拡散した。すなわち、その一つはサンフランシスコ川中流域からバイア北部を流れるヴァザバリス(Vaza Barris)川の源流部へと移動し、さらにダイヤモンド高原(Chapada Diamantina)を越えてサンフランシスコ川の上流部へと到達する植民ルートである。内陸部のダイヤモンド高原へは、イタピクル川やパラグアス川を遡上して到達する植民ルートも開かれていた。

サンフランシスコ川をその上流部へと南下する植民ルートは、18世紀前半の金ブームの際にはさらに頻繁に利用されるようになり、多くの牧童たちがミナスジェライスの金鉱地帯へと移動した。こうして、セラード(Cerrado)地帯へも新たに入植者が入り込んで牧場が開設され、ノルデステはサンフランシスコ川を通じてブラジル南部と結びつくことになった。サンフランシスコ川がブラジル“国家統合の川(Rio da unidade nacional)”と呼ばれるようになったのはこのためである(第1図)。

もう一つは、バイアとペルナンブコの両カピタニアを分離していたサンフランシスコ川を横断して、北方のペルナンブコやピアウイ、マラニオンへと進出する植民ルートであった。サンフランシスコ川を横断した入植者たちは、パルナイバ(Parnaíba)川右岸の支流であるグルゲイア(Gurgueia)川やカニンデ(Canindé)川に辿

り着き、17世紀末には現在のピアウイ州の内陸部で積極的な植民活動を展開した。恒常河川のバルナイバ川が作り出す良質な天然牧草地に恵まれたピアウイの牧場は、ノルデステの中でもとくに優れたものであり、後にバイアで消費される家畜の大半をピアウイの牧場が供給するようになったという。牧畜業はさらにパルナイバ川を横断して、北方大西洋沿岸部からイタペクル(Itapecuru)川を遡ってきた牧畜業と、マラニオン州南部のパストスボンズ(Pastos Bons, 良質な牧草地の意味)付近で合流することになった。マラニオン州のイタペクル川流域も、牧場開発が著しく進展した地域であった。

さらに、牧畜業はピアウイ州から北東方向へも伝播・拡散し、リオグランデドノルテやセアラ州を流れるピラーニャスーアス(Piranhas-Açu)やアポディーモソロ(Apodi-Mossoró), ジャグアリベ(Jaguaribe)といった諸河川の上流部へと到達した。そして、彼らは次に述べるペルナンブコから海岸沿いに進んできたもう一つの植民の流れと合流することになった。

2) ペルナンブコからの植民ルート

内陸部へ向かうもう一つの進入経路は、ペルナンブコのオリンダを起点として沿岸部を南と北の2方向へ向かうものであった。このうち、ドゥアルテ・コエリョ(Duarte Coelho)により進められた南方への植民活動は、サンフランシスコ川に到達してまずその左岸にペネド(Penedo)の町を建設した。その後は、バイアからの入植者同様、サンフランシスコ川の左岸を上流へと遡上しながらその河畔に牧場を開設していった。そして、海岸から遠く何百レグア(Légua, 1レグアは約6km)も離れた内陸部で、サンフランシスコ川を横断してさらに北上を続けるバイアの入植者たちと合流することになった。

一方、オリンダから北方へ向かった入植者たちは、パライバ、リオグランデドノルテ、セアラ、ピアウイ、そしてマラニオンへと海岸部を

北上した。そして、大西洋に流入するピラニヤスーアス、アポディーモソロ、ジャグアリベ、パルナイバ、イタペクルといった諸河川を河口から上流(内陸部)へと遡上して、その流域に牧場を開設していった。そして、最終的にピアウイ方面から北上してきたバイアの入植者たちと合流することになった(第1図)。

3. ウシ道の形成と村落の出現

牧畜業の内陸部進出にともない、その進入経路沿いにはウシ飼いを基盤とする多数の村落が形成された。それらは当初、広大なセズマリア(Sesmaria)を下賦されたファゼンダとして設置されたもので、その領地は沿岸部サトウキビ地帯のセズマリアよりさらに広大なものであった。しかも、その巨大な領地はごく少数の大地主たちに占有されていた。その代表的な存在が、サンフランシスコ川の河畔に250レグアにもおよぶ大農場を所有し、塔の館(Casa da Torre)でも知られるガルシア・ダヴィラ(Garcia d'Ávila)一族や、バイアのモーロ・ド・シャペウ(Morro do Chapéu)からミナスジェライスのヴェリヤス(Velhas)川まで広がる広大な領地を所有したアントニオ・ゲードス・デ・ブリト(Antônio Guedes de Brito)一族、あるいはピアウイに50を越えるファゼンダを開設したドミンゴス・アフォンソ・マフレンセ(Domingos Afonso Mafrense)一族などであった。

セルトンに移植された牧畜業は、沿岸部のサトウキビ地帯に食糧や皮革製品を供給するという重大な役割を担っていた。そのため、セルトンの牧場からはウシたちがサルヴァドールやオリング(後にレシフェ)などの沿岸部に立地する大都市の消費市場に向けて、徒歩により輸送された。こうして、ウシの生産地であるセルトンの牧場とその消費地である沿岸部の諸都市を結ぶウシ道(Estrada da boiada)が形成されていった。

しかし、干ばつ常襲地で水が少ないセルトン

を横断しての長旅は、極めて苛酷なリスクの大

きいものであった。そのため、どうしてもその途上にウシや牛追いたちが休息できる停泊地が必要であった。セルトンからの長旅でげっそりやせ細ったウシたちが、肉を付け体力を回復するためには、良質な天然牧草や豊富な飲み水、そしてウシが舐める岩塩に恵まれた(このような場所にはサリナス Salinas などの地名が残っている)、短期間の逗留が可能な停泊地が必要とされた⁷⁾。

このような条件を備えたサンフランシスコ川やパルナイバ川などの恒常河川の流域や、オリョダグア(Olho d'água)と呼ばれる湧き水のある地域には数多くの停泊地が形成された。また、ウシが川を横断できる浅瀬(Travessias)のある場所や、牛追いたちの逗留に必要な食糧や薪などの物資を供給したりウシの売買が可能な定期市の開催される場所も重要な停泊地となった。こうして、ウシ道沿いのこのような立地条件に恵まれた場所には、必然的にほぼ一日行程の距離だけ離れて家畜囲い(Curral)を備えた停泊地が形成され、それが核となって町や都市が発達した。

ちなみに、アンドレ・ジョアン・アントニル(André João Antonil)は1711年に出版された彼の著書⁸⁾で、バイアに立地する500の牧場がサンフランシスコ川やヴェリヤス川(Rio das Velhas)、ラス川(Rio das Rãs)、ヴェルデ川(Rio Verde)、ペラミリン川(Rio Peramirim)、ジャクイベ川(Rio Jacuípe)、イタピクトウ川(Rio Itapicutu)、レアル川(Rio Real)、ヴァザバリス川(Rio Vaza Barris)、セルジペ川(Rio de Sergipe)といった河畔に立地することを指摘しているという。

こうして、牧畜業は17世紀末頃までに今日のバイア州、ペルナンブコ州、パライバ州、リオグランデドノルテ州、セアラ州、ピアウイ州、そしてマラニョン州南部に至る、約100万km²にもおよぶ広大な空間を占拠するに至った。そして、16世紀中頃にノルデステに初めて導入されたとみられるウシの頭数は、18世紀初頭にはバイア

で500,000頭以上、ペルナンブコで800,000頭以上に達したとみられている⁹⁾。

都市市場への家畜輸送ルートであるウシ道には、ペルナンブコとバイアの都市へ通じる2つの代表的なものがあった¹⁰⁾。ペルナンブコへ通じるウシ道は、俗にマスカテ (Mascate, レシフェのポルトガル人に対してブラジル人が付けたあだ名)の道(Caminho dos mascates)と呼ばれ、セアラ州のフォルタレーザとペルナンブコ州のオリンダ(後にレシフェ)を結んだ。この道は、ウシ道であると同時に都市に物資を運ぶ商人たちの道でもあった。

そのルートは、大西洋の沿岸部をセアラ州のフォルタレーザ (Fortaleza) からアラカティ (Aracati), リオグランデドノルテ州のモソロ (Mossoró), アス (Açu, Assu), ナタール (Natal), サンジョゼデミピブ (São José de Mipibu), パパリ (Papari), クニャウ (Cunhaú) またはカンガレタマ (Canguaretama), パライバ州のママンガアペ (Mamanguape) やエスピリトサント (Espírito Santo), そしてペルナンブコ州のゴイアナ (Goiana) を経てオリンダ (Olinda) やレシフェ (Recife) へと至るものであった (第1図)。

オリンダやレシフェへと通じるウシ道には、内陸部の乾燥地帯を通過するより古典的なウシ道がもう1本存在した。それは、ピアウイ州へと向かう入植者たちが集結したセアラ州内陸部のクラテウス (Cratéus) を発ち、カリリノーヴォスのタウア (Tauá) やイコ (Icó) を経由して、パライバ州の内陸部に位置するサンジョアンドリオドペイシ (São João do Rio do Peixe), ソウザ (Souza), ピラーニャス (Piranhas, 現在のポンバル Pombal), パトス (Patos) に至る。そして、さらにボルボレマ高地を登りタペロア (Taperoá), ミラグレス (Milagres), ママンガアペ, タンベ (També), ゴイアナを経てオリンダへと達するルートであった (第1図)。

一方、牧畜業の内陸部進出を中心的に担った

バイアへは、西部のダイヤモンド高原はもとより、南部のイリエウス (Ilhéus) やポルトセグーロ (Porto Seguro) といったカピタニアからもウシの群がサルバドールの都市市場を目指して集結した。さらに、バイア人が植民の端緒をつけたメイオノルテ (Meio Norte, 中北部) と呼ばれるマラニョン・ピアウイ両州の内陸部からも、セルトンの牧畜業が最盛期を迎える18世紀には、サルヴァドールを目指して何百頭ものウシの行列が続いた。

マラニョンからバイアへと通じる内陸交通は、17世紀後半に開設されたもので、パルナイバ川の左岸に形成されたパストスボンスからは、ピアウイ州のかつての首府であったオエイラスやピコス (Picos) を経由して、サンフランシスコ川中流域のカプロボ, バイア州北部のジェレモアボ (Jeremoabo) を通りサルヴァドールへと向かう、実に長大なウシ道が頻用された。ペルナンブコ州のアグレステに立地するサンジョゼドスベゼロ (São José dos Bezerra) は、ウシの群をサルヴァドールまで運ぶ牛追い (Tangedores de gado) たちが居住して形成された代表的な町であった。

アンドレ・ジョアン・アントニルは、セルトンからバイアへと向かう牛追いの様子を次のように記録しているという¹¹⁾。“バイアへとやって来る牛追いたちは、通常100頭, 160頭, 200頭, そして300頭といったウシの群を引き連れていた。これらの牛追いは、ほとんど毎週のようにとある停泊地に辿り着いた。そこは町から8レグア (約48km) も離れた牧草地で、商人たちはそこで (ウシの) 売買を行った。一年のとある週には、牛追いたちが毎日到着するような時期もあった。ウシを追って来るのは、白人, ムラート, 黒人, そしてインディオで、彼らはこの仕事で稼ぎを得ていた。一人が先頭に立って歌を歌いながら (ウシの群を) 先導した。他の者はウシたちが道を逸れたり林へ逃亡して野生化 (se amontem) しないように乱暴に (家畜を) 追い立てた。一日の行程 (Jornadas) は、ウシたち

が立ち止まってはむ牧草の状態により、4～6レグア(約24～36km)であった。しかし、水が不足している場所では、停泊できる場所が見つかるまで、15～20レグア(約90～120km)も僅かな休息をとるだけで昼夜を徹して歩き続けた。川を横断する時には、牛追いの一人がウシの道具を頭に乗せ、泳ぎながらウシたちに渡ることのできる浅瀬(Vau)を示した。”とピラニアがたくさん生息するノルデステの河川では、横断に際して瘦せたウシを犠牲に川に突っ込むこともあったという。それはいわば川の通行料のようなものであった。

ウシ追いたちは、年に1～2回、100～300頭ものウシの群を引き連れて水不足のセルトンを発ち、数週間から数カ月もかけて沿岸部の大都市を目指した。このようなウシの輸送が1年で最も多かったのは、12月から翌年の1月にかけてであった。それは、この時期に信頼できる確実な最初の雨が降り、それで芽吹いた草(asbabugens)を家畜たちの餌に利用できたからである。実際には12月を過ぎて1月に入っても雨が降らない干ばつ年が多いが、それでもかつては“1月の雨のように確かである(certo como chuva em Janeiro)”と表現されるほど、この時期の雨は牛追いにとって極めて重要なものであった¹²⁾。

内陸部のセルトンの牧場と沿岸部の都市市場を結ぶウシ道の形成は、ブラジルの国土拡大を支える重要な基礎的要因となった。現在のブラジル経済を支える幹線道路は、その多くがかつてのウシ道で、それがその後自動車道として整備・拡大されたものである。18世紀に牛追いや旅人の停泊地として形成された内陸部の多数の村落(Povoado)は、その後の牧畜業や後述する綿花栽培の発展にともない、18世紀後半から19世紀にかけて町や市、そして1889年の連邦共和制移行後はムニシピオ(市郡)へと昇格して、現在の内陸部主要都市の基礎を築き上げた。

II 綿花栽培の導入と発展

牧畜業の内陸部進出により始まったセルトンの空間占拠は、18世紀後半からの著しい綿花栽培の普及により飛躍的に加速化され、同世紀の末をもってほぼ完了することになる。綿花は唯一ノルデステの内陸部を舞台として、ブラジル経済史に残る大きなブーム(Boom)を創生した重要な農作物であった(写真2)。

そもそも、ワタは本来熱帯のサバンナ地域を原産とする作物で、その用途はさまざまである。綿毛は綿糸や綿織物、紐、綱、脱脂綿、布団綿などに加工される。また、綿繰機で繊維を除いた後に残る種実を搾って取る綿実油は、食用油や石鹼などの原料となる。さらに、綿実油を搾った後の綿実滓は、家畜の飼料や畑の肥料として利用される。

ワタの栽培や利用の起源はよくわからないが、世界各地に数多くの種や品種が存在している。ラテンアメリカでも、ワタはコロンブスが新大陸を発見する遙か以前から既にインディオたちの間で利用されており、ペルーの遺跡から発掘されたミイラを包む綿布などは紀元前1500年頃の利用を示しているという¹³⁾。

ブラジルでは、木本性ワタ(Algodão arbóreo)と草本性ワタ(Algodão herbáceo)の両種が栽培されているが¹⁴⁾、このうちブラジルワタ(Algodão brasileiro)とかモコ(Mocó)、あるいはセリド(Seridó)と呼ばれている木本性ワタは、南米を原産地とする代表的なワタの一つである。インディオたちは古くからこの繊維で紐を編みハンモックを作ってきた。高木の永年作物であるこの木本性ワタからは、乳白色で絹のような光沢を持つ細くて長い極上の繊維がとれるが、乾燥が厳しい本地域での栽培は生産性が低いうえに収量の変動性が大きい難点があり、栽培地域が大きく拡大することはなかった。

綿花栽培の発達は、人口の増大と町の発展を促しただけではなく、牧畜業の導入により既に

確立されていた内陸部の社会組織にも大きな変革をもたらした。すなわち、牧畜業と綿花栽培の両方に携わるファゼンデイロが増加する中で、彼らに従属して綿花や自給用作物を栽培するメーロ(meeiro, 収益の半分を労働報酬として地主から受け取る小作農)やテルセイロ(terceiro, 収益の1/3を労働報酬として地主から受け取る小作農)といった分益小作農が生み出された。ファゼンデイロに隷属する土地無し農民の形成は、今もなお厳然と存続しており本地域の社会組織を大きく特徴づけている。

このような、18世紀後半に始まるノルデステの内陸部における綿花栽培の著しい発展の背景には、綿繰機や自動綿紡績機械の発明¹⁵⁾によるイギリスでの木綿工業の飛躍的な発展と、それに伴う国際市場での綿花需要の急騰があった。イギリスはブラジルのほかにもアメリカ合衆国の南部やエジプトのナイル河谷、そしてインドなどにいくつかの綿花供給地を持っていたが、当時ブラジルは他の綿花供給地よりも優位にイギリスへ綿花を輸出することができた。すなわち、18世紀後半はアメリカ合衆国の独立戦争の時期に当たり、本国政府のイギリスに対する対立感情の高まりはついに米英戦争(1812~1814年)にまで発展して、アメリカは綿花の輸出どころではなかったのである¹⁶⁾。

ノルデステにおける綿花栽培の著しい発展と綿花の本格的な海外輸出を支えたのは、北アメリカからマラニオン州に導入されたインドワタに起源を持つ草本性ワタであった。草本性ワタは木本性ワタに比べて繊維が短いが、収量は多く品質も非常に高いものであった。マラニオン州では、ジョゼ1世の宰相として活躍したポンバル侯(Pombal, Marques de ; Sebastião José de Carvalho e Melo)の尽力により、1756年に設立されたグランパラ&マラニオン会社(Compania do Grão Pará e Maranhão)を中心に綿花の輸出が拡大した。綿花栽培の中心地となったのは、マラニオン州の内陸部に立地するカシアス(Caxias)であった。アフリカから輸入

された多くの黒人奴隷が綿花栽培に携わったため、その発展ぶりは“綿花は白いがマラニオンを黒く染めた(O algodão, apesar de branco, tornou preto o Maranhão)”と形容された¹⁷⁾。

マラニオン州に導入された草本性ワタは、その後ノルデステ全域に伝播・拡散したが、とりわけマラニオン州イタベクルー川上流域、セアラ州ジャグアリベ川上流域、リオグランデノルテ州セリド(Seridó)河谷、そしてペルナンブコ州のアグステ(とくにプレジヨス)一帯がその主産地となり、18世紀後半から19世紀にかけて大きな発展を遂げた。こうして、綿花栽培の普及により熱帯乾燥・半乾燥のセルトンでも人口が増加し、村落や町が拡大・発展した。マラニオン州のカシアス、セアラ州のキシェラモビン(Quixeramobim)、イコ(Icó)、タウア(Tauá)、クラト(Crato)、リオグランデノルテのアス(Açu)、カイコ(Caicó)、パウドスフェロス(Pau dos Ferros)、サンジョアンバチスタ(São João Batista)、パライバ州のポンバル(Pombal)、ペルナンブコ州のシンプレス(Cimbres)などは、綿花栽培の普及とともに顕著な発展を遂げた代表的な町である(第1図)。

さらに、1861~1865年にはアメリカ合衆国で南北戦争が勃発し、南部の綿花地帯は荒廃して国際競争力を失う一方で、ワタの国際価格は高騰した。ブラジルは綿花栽培の最大のライバルであったアメリカ合衆国の混乱に乗じて、この機にノルデステで綿花栽培を積極的に推進し、国際市場におけるブラジルワタの優位性を確保したのである。19世紀中頃には、綿花栽培の中心地であったマラニオン州からは年間6,000~7,000トンの綿花が輸出されていた¹⁸⁾。

ノルデステで綿花栽培が飛躍的に発展した背景には、このような外的要因のほかにいくつかの内的要因が存在した。すなわち、綿花栽培はサトウキビ栽培と異なり、トウモロコシやフェジョンマメ、ソラマメ(Fava)、マンジョカといった住民の主要な食糧作物と間作(Culturas intercalares)が可能のため、農民は食糧生産の

規模を維持しながら同時に商品作物である綿花の栽培も継続できたのである。間作による綿花と食糧作物の同時生産は、多角的農業 (Policulture) や食糧の自給自足、そして小地主の形成を推し進めた。

また、綿花栽培は既に内陸部で発展を遂げていた牧畜業とも共生・共存が可能であった。すなわち、食糧作物—綿花畑 (Algodal) では、収穫後にウシたちを刈跡放牧することで、不要な作物の茎や葉を家畜の貴重な飼料として利用することができた。とくに餌が不足する乾季には、ワタの茎や葉が家畜の基幹食糧となった。また、ワタはその綿毛 (Pluma) のみが輸出されたため、綿実油を搾った後の残り滓もウシたちの滓飼料や畑地の肥料として有効に利用することができた。

さらに、ワタはサトウキビのように直ぐに加工する必要がないため、農業地域 (綿花栽培地帯) と工業地域 (綿毛加工地帯) は、それぞれ内陸農村と沿岸都市に遠く分離したまま存在することが可能であった。そのため、綿花栽培農場はエンジェーニョのように農産加工業をも内包する大農場を形成する必要がなく、内陸農村で牧畜業や自給用作物栽培を同時に営む小規模経営でも維持することが可能であった。その結果、沿岸部のエンジェーニョとは異なり、内陸部の牧牛—綿花栽培ファゼンダでは相続により農場が容易に分割され、小規模農地の集積を促す結果となった。

このような外的・内的諸条件の中で発展をみせたノルデステの綿花栽培は、19世紀には既に金の経済サイクルを抜け出したミナスジェライス州にも伝播して拡大をみせた。20世紀に入ると綿花栽培はさらにサンパウロ州へと伝播し、1930年代以降は日系移民を中心とする外国からの農業移民の手により大きな発展を遂げた¹⁹⁾。その背景には、1920~1940年にかけてノルデステで進められた草本性ワタの品種改良の成果があった²⁰⁾。綿花栽培の広範な伝播と発展は、ワタの生産地であるノルデステの内陸部と、加工・

消費・輸出地であるノルデステの沿岸部やブラジルの南部・南東部を結びつける重要な役割を果たした。

ブラジルにおけるワタの栽培面積は、1950年代に約290万 ha であったものが、1970年代初めには約460万 ha にまで拡大した。しかし、1980年代の半ばにビクード (Bicudo) の虫害が全国的に蔓延し、加えてノルデステの半乾燥地域で続いた干ばつなどの天候不順や、綿花の国際市場価格の下落などの悪条件が重なり、1987年にはその栽培面積が195万 ha に激減してしまった。綿花栽培はその後も減少を続け、1992年には187万 ha (内、草本性ワタが159万 ha、木本性ワタが28万 ha) に減少してしまった²¹⁾。

とりわけ、ノルデステだけで栽培がみられる永年作物の木本性ワタはその減少が著しい。木本性ワタは栽培周期や開花期間が長いと、とくにビクードの被害を被り易い欠点がある。そのため、現在では栽培周期が短く害虫の好む芽形成期が短い (すなわち結実が早い)、病害虫に強く品質も高い栽培品種の開発に力が注がれている。加えて、平均反収の高い栽培品種の開発も急務であり、木本性ワタで400kg/ha、草本性ワタで1,500kg/ha の収穫が目指されている。さらに、灌漑による綿花栽培が可能で草本性ワタの品種改良も進められており、2,500~3,000kg/ha の収穫量の実現が試みられている²²⁾。

III セルトンの新興作物 (Boom crops)

不規則な降雨と厳しい乾燥に特徴づけられるノルデステの内陸部では、元来、天然植物の採集や耐乾性作物 (Dry crops) の小規模な栽培が一般的であり、牧畜業や綿花栽培のように広く伝播して著しい経済発展を遂げた農業活動はほかには見当たらない。マラニョン州やピアウイ州で卓越する油糧用のババスヤシ (Babaçu, *Orbignya speciosa*) や、セアラ州で卓越する植物蠟・建材用のブラジルロウヤシ (別名カルナウバヤシ, *Carnaúba*, *Copernicia cerifera*)、植物織

維用のカロア(Caroa)、救荒植物(Emergency plants)のウンブゼイロ(Umbuzeiro)やマニソバ(Maniçoba)、ファヴェレイロ(Faveleiro)などの採集・加工は、いずれも天然の耐乾性植物に依存した小規模な採集経済(Extractive activities)の域にとどまっている。

こうしたなかで、牧畜業や綿花栽培には遠く及ばないものの、景観的にも経済・社会的にも明確に認知しうる農業革新(Agricultural innovation)を引き起こしたブーム作物(Boom crops)に、飼料作物のバルマ(Palma)と繊維用のサイザル麻(Agave, *Agave sisalana*)がある。

棘無しサボテンのバルマは、18世紀の植民地時代にカナリア諸島からノルデステに最初に導入されたと考えられている。当初、バルマは西洋で染料として珍重された洋紅(Red juice)の原料となるエンジムシ(Cochineal insects)²³⁾を飼養するために導入された。バルマを用いたエンジムシの飼育は、ブラジルでは失敗に終わったが、棘無しサボテンはセルトンの乾燥した気候や貧弱な土壌条件にみごとに適応した。そして、内陸部で顕著な発展をみせていた牧畜業の飼料作物として重要な役割を担うようになった。

オクタヴィオ・ドミンゲス(Octavio Domingues)によると、ノルデステで最初にサボテンの飼料利用が伝えられるのは1893年のことで、20世紀の初頭には2種類の棘無しサボテンが飼料として利用されていたという。すなわち、一つはメキシコから導入された扇形の大きな棘無しサボテンで、オープンティア(*Opuntia ficus-indica*)とか大バルマ、刻みバルマと呼ばれる品種である。もう一つは、オープンティアよりも小さなノパレア(*Nopalea cochenillifera*)とか小バルマ、甘味バルマと呼ばれる品種である。バルマ栽培は1902年にペルナンブコ州カルアルーで確認されているが、同州や隣接するパライバ州への確かな伝播は1930年頃まで実現せず、1930年代が同地域におけるバルマの急速な拡散時期であったという²⁴⁾。

バルマは棘無し種のサボテンの自然淘汰や突然変異から生み出されたもので、重量の93%以上を占める水分貯蔵能力と高い栄養価は、頻発する干ばつの度に深刻な餌や水不足に直面するセルトンのウシ飼いにあって、ほかには代え難い貴重な飼料源となった²⁵⁾。ウシ飼いたちは、自給用のバルマを宅地やウシ囲い周辺の畑、あるいはカーチンガに植え付けた(写真3)。一年中緑色のバルマは、乾季の殺伐としたセルトンの風景の中で、僅かながらみずみずしさを提供してくれる。バルマの導入により、内陸部のウシ飼いたちは干ばつに対して完全に無力・無防備ではなくなった。バルマは彼らにとってまさに救世主的な作物となった。

一方、ブラジルでアガヴェと呼ばれるサイザル麻は、メキシコを原産とするリュウゼツラン科の木質草本で、強靱で光沢に富んだ繊維原料を提供してくれる。加工技術の進歩により、畑地の肥料や製紙用の繊維(セルロース)として果肉部(Bucha)の利用も可能となった。サイザル麻は、年平均気温23℃以上、年降水量1,000mm以下の温暖乾燥地を好み、地力の低い地域でも栽培が可能である。そのため、理想的な栽培地は適度な降雨のあるアグレステやブレジョスであるが、より乾燥が厳しいセルトンでも栽培は可能であった。そのため、第二次世界大戦中の1940年頃にアグレステに導入されたサイザル麻は、その後の国際市場価格の高値にも支えられて、決して栽培適地とはいえないセルトンのカーチンガ原野や既存の綿花畑でも広く栽培されるようになった(写真4)。サイザル麻の普及・発展は1970年頃まで続いた。

サイザル麻は、農閑期に当たる乾季に植え付けが可能で、定植後は最初の2年間だけ除草をすれば済む省力作物である。一般に畝間は2.7m、株間は1.8m位とされるが、実際にはもっと密植されている²⁶⁾。定植後3~4年で収穫が始まり、10年生位まで収穫が可能であるが、収奪農業ゆえに収穫量は年とともに定常的に減少する。

サイザル麻は栽培にほとんど手が掛からないが、収穫と繊維の取り出し作業に集中的に多量な人力が必要となる。すなわち、傾斜地でのサイザル麻の切り出しと運搬は重労働であるし、繊維は葉を切り取ってから24時間以内に取り出す必要がある。そのため、収穫後は休む間もなく繊維の分離・加工作業に従事しなければならない。また、葉から分離した繊維はすぐに天日乾燥して真っ白に漂白する必要がある（写真5）。そのため、サイザル麻を導入したファゼンデイロは、労働力としてモラドールをたくさん農場に抱え込むか、分益小作農を雇い入れる必要があった。

サイザル麻は、綿花栽培のように間作により自給用の食糧作物を栽培するには不向きである。すなわち、サイザル麻はまだ背が低い最初の1～2年だけはトウモロコシやフェジョン豆などの間作が可能であるが、背が高くなり収穫期に達してからの間作は不可能である。そのため、綿花栽培の普及によりセルトンに根付いた食糧作物と商品作物の共存による持続的な多角的農業の基盤を大きく揺るがすものとなった。また、サイザル麻はサトウキビ同様、乱高下する市場価格に大きく影響される商品作物であった。

おわりに

ブラジルの経済は、16世紀に始まるブラジル木の採集から、砂糖、タバコ、カカオ、綿花、金、コーヒー、生ゴムへと移行する、ヨーロッパへの輸出を目的とした経済性の高い単一商品の生産拡大（ブーム、Boom）と衰退（バスト、Bust）の繰り返しにより進展してきた。なかでも、ノルデステの沿岸部を舞台に植民当初から発展を遂げた製糖業は、その経済的な重要性や約3世紀にも及ぶ長い経済サイクルなどの点で、他の商品の追従を許さぬほどブラジル経済史に果たした役割は絶大であった。

本研究では、このような製糖業の著しい発展

により繁栄をみせたノルデステ沿岸部（ゾナダマタ）の従属・補完地域として、約1世紀以上も遅れて17世紀以降に開発が進められたノルデステ内陸部（セルトン）の植民過程と経済発展の特徴を解明した。その結果、以下の諸点が明らかとなった。

セルトンの開発は、17世紀以降に進展したゾナダマタへの食糧供給を目的とする牧畜業の内陸部進出と空間占拠により進められた。牧畜業の内陸部進出は、パイアのサルヴァドールとペルナンブコのオリンダ（後にレシフェ）を起点とする2つの異なる植民ルートにより進められたが、いずれも主要な河川沿いに牧場を開設しながら奥地を目指すものであった。これは、乾燥の厳しいセルトンの牧畜業では、どうしても河川が提供する豊富な飲料水や天然牧草地、岩塩などが必要であったことによる。こうして、ノルデステの主要な河川の河畔には数多くの牧場が開設されていった。

セルトンの牧場で生産されたウシは、徒歩によりオリンダ（後にレシフェ）やサルヴァドールの都市市場へと出荷された。その結果、ウシの生産地であるセルトンとその消費地であるゾナダマタを結ぶウシ道が形成され発達した。しかし、干ばつ常襲地のセルトンを横断してのウシの運搬は、極めて苛酷なリスクの大きいもので、どうしてもその途上にウシや牛追いたちが休息できる停泊地が必要となった。こうして、ウシ道沿いには必然的にほぼ一日行程の距離だけ離れて家畜囲いを備えた停泊地が形成され、それが核となって町や都市が形成され発展した。

牧畜業の内陸部進出により始まったセルトンの開発と空間占拠は、その後18世紀後半から始まる綿花栽培の著しい発展により飛躍的に加速化され、同世紀の末をもってほぼ完了することになった。18世紀後半に導入され拡大をみせた綿花は、唯一ノルデステの内陸部を舞台にブラジルを代表する経済ブームを引き起こした農産物である。また、牧畜業や綿花栽培には遠く及

ばないものの、飼料作物のパルマや繊維用のサイザル麻は、ノルデステ内陸部のブーム作物として景観的にも経済・社会的にも明確に認知できる農業革新を創出した。

注および参考文献

- 1) ノルデステで最初にエンジェーニョが建設されたのは、ペルナンブコ州のイガラス(1536年)とオリンダ(1537年)で、これにバイア州のサルヴァドール(1549年)が続いた。これらの地域は、ポルトガルの前哨地として植民活動の拠点になるとともに、ヨーロッパやアフリカから伝播したさまざまな文化が融合・拡散する文化的核心地域(Culture hearts)となった。ちなみに、ペルナンブコ・バイアの両カピタニアのエンジェーニョ数は、1570年頃にはそれぞれ23・18であったものが、1585年には65・45、そして1629年には150・80と、ともに急激な増加を遂げたことがわかる。
- 2) Webb, K. E. (1974): *The changing face of Northeast Brazil*. Columbia University Press, 205p.
- 3) ただし、セルトンの牧畜は極めて生産性の低いものであった。すなわち、放牧密度は1km当たり2頭以下と少なく、痩せ細ったウシの肉質は悪い上に、1頭当たり120kg以上にはならなかった。
- 4) Andrade, Manuel Correia de (1979): *O processo de ocupação do espaço regional do Nordeste*. SUDENE, 37-52.
 オエイラスは、カピタニアピアウイの首府として1758年に建設された都市である。テレジーナが首府となるまでの約100年間、ピアウイの首府として栄えた。オエイラスは17世紀末に建設されたモシャ(Mocha)という名の教化集落をその起源としており、1718年にはノッサセニョラダヴィトリアデモシャ(Nossa Senhora da Vitória de Mocha)という町に昇格した後ピアウイの首府となった。また、ピアウイ州南部のパルナグア湖畔に立地するパルナグアは、かつて商業の中心地として栄えたところで、ヨーロッパの産物をファゼンデイロに売却する行商人たちが寄り集まったという。しかし、19世紀初めには衰退を始め、多くの家屋が放棄されて廃墟となったという。
- 5) ノルデステに住んでいた代表的な先住民族で、言語帰属は不明である。白人との接触の後、イエズス会の教化集落に移り住んだが、19世紀末までには部族としては消滅し、混血してブラジル社会に呑み込まれている。マニオクやトウモロコシなどを栽培し、比較的高い文化を持っていたといわれている。
- 6) バイア北方の沿岸部では、1587年にタトゥアラ(Tatuapara)で植民が行われ、豪華な教会が建立された。また、イエズス会の活動がガルシア・ダヴィラの土地やヴァザバリス川の滝近くに立地するサンクリストヴァン(São Cristóvão)の町で進められた。
- 7) セアラ州では、オリンダまでの長旅でウシが痩せ細るうえに、高い輸送コストを支払わねばならないという問題を軽減するために、ウシを地元で屠殺し、肉を塩漬けて干し肉(Carne seca または Charque と呼ばれる)の形で輸送する方法が1740年頃までに考案された。製造所(Charqueada)では、ジャグアリベ川河口のアラカティで生産される天然塩を利用して干し肉を作り、セアラ肉(Carne do Ceará)として大都市へ出荷した。
- 8) Antonil, Andre João (1711): *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*. (São Paulo, 1923)
- 9) Cascudo, Luís da Câmara (1985): *Tradições populares da pecuária Nordestina*. Editora ASA, 81p.および前掲4)
- 10) 前掲9)
- 11) Vianna, Hélio (1992): *História do Brasil. MELHORAMENTOS*, 217~218.
- 12) 前掲9)
- 13) 農林省熱帯農業研究センター(1975): 『熱帯の有用作物』農林統計協会, 410~417.
- 14) 木本性ワタは、品種により差があるものの、約10~15年の生産サイクルをもち、初収穫まで2年を待った後は、新たな投資をせずに毎年利益を得ることが可能である。一方、草本性ワタは栽培サイクルが短いので、資本投資に対する労働報酬(収入)のリターンが早い。
- 15) 1733年のジョン・ケイの飛び梭の発明以降、1764年にはハーグリーブスがジェニー紡績機、1768年にはアークライトが水力紡績機、1779年に

- はクロンプトンがミュール紡績機を發明している。また、1793年にはホイットニーによる綿繰機の發明があった。
- 16) イギリスがエジプトに対する主権を確立し、ナイル河谷での灌漑農業による綿花栽培に直接投資を始めるようになるのはさらに遅く、エジプトを軍事占領した1882年以降のことであった。
- 17) Caio, Prado Jr.(1969) : *História econômica do Brasil*. Editora Brasiliense, São Paulo, 82p. 山田睦男訳(1972) : 『ブラジル経済史』新世界社, 153p.
- 18) しかし、綿花栽培の著しい発展にも関わらず、ブラジルではそれを加工する繊維工業がなかなか発達せず、原材料である綿花輸出のみが長く続いた。ブラジルに繊維工業が移植されるのは、1807年、ナポレオンの大陸封鎖令に服さず、ポルトガル本国の統治をイギリスに委ねてブラジルに亡命したD.ジョアンが、すべての工業を自由化してから後のことであるという。マラニョン州では1855年に最初の綿紡績工場が設立されている。
- 19) 1930年代以降にサンパウロ州で綿花栽培が著しく発展した背景には、当時コーヒーが生産過剰で大安値となり州政府が新たなコーヒーの植栽を禁じたため、その代替作物としてワタが導入されたことがある。
- 20) この期間に、セアラ州ではH-29, H-52, H-105, パライバ州では Fusariose (委瀾病) 抵抗性品種、ペルナンブコ州では SU0449, SU0450, SU0450-8909 といった乾燥に強い品種が開発されている。また、1970年代の半ばにワタの研究調査機関として全国ワタ研究センター(Centro Nacional de Pesquisa de Algodão)がパライバ州に設立されてからは、新品種 BR1 や PR4139, さらにビクードに対する抵抗性品種として CNPA2H, CNPA3H, CNPA PRECOLEL の3品種が開発された。さらに、1987年にはノルデステにおける灌漑綿作用の長繊維品種として CNPA ACALA 1 が開発された。
- 21) JICA サンパウロ事務所(1992) : 『ブラジル国における農牧研究機関の研究現状と方向』JICA, 22~26.
- 22) 前掲21)
- 23) サボテンに寄生するエンジムシの雌を乾燥・粉末にしたものがコチニールで、食品や化粧品の色づけに利用される。メキシコ原産のカイガラムシはエンジムシの一種。
三橋 淳(1984) : 『世界の食用昆虫』古今書院, 192~193.
- 24) ~25) 前掲2)
- 26) 前掲2)
Webb はパライバ州ポシーニョスのアガヴェ栽培の事例として、畝間が2.5m, 株間が1 m で、1 ha 当たり4,100株のアガヴェが定植されると報告している。



写真1 パウロアフォンゾの水力発電所

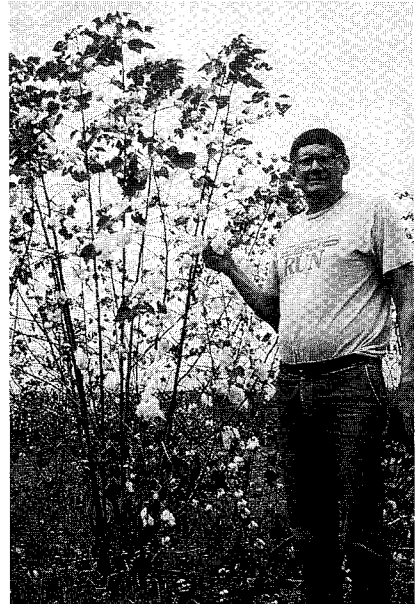


写真2 パライバ州パトス近郊の綿花畑

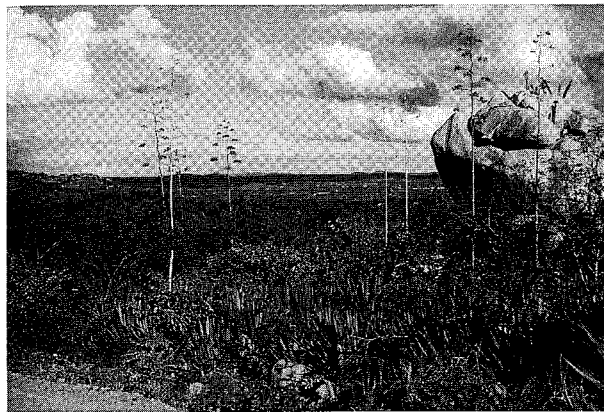


写真4 テシェイラ台地のサイザル麻畑



写真3 家畜飼料の棘無しサボテン・パルマ



写真5 サイザル麻繊維の天日乾燥と漂白